

# 魔法の Wallet プロジェクト 活動報告書

報告者氏名： 古賀明美

所属： 武雄小学校

記録日： 2020年 2月 10日

キーワード： AD/HD、コミュニケーション、表現、語彙力、構音指導、言葉の広がり

## 【対象児の情報】

- ・ 学年 小学2年
- ・ 障害名 AD/HD、構音障害
- ・ 障害と困難の内容
  - 語を結びつけてイメージすることが苦手である。
  - 場面を想起することが苦手である。
  - やりとりが成立しにくく、会話が続かないことが多い。
  - /ki/と/ki/の中間のような音や/r/音と/d/音の混同がある。

## 【活動目的】

- ・ 当初のねらい

**話すことを楽しみ、身の回りの人と進んで話すことができる。**

- ・ 実施期間 平成31年4月から令和2年1月まで
- ・ 実施者 古賀明美
- ・ 実施者と対象児の関係 通級担当者

## 【活動内容と対象児の変化】

- ・ 対象児の事前の状況

困難①…感情や思いを表現する語彙が少ない。→語を結びつけてイメージを膨らませたり、話の内容から場面を想起したりすることが苦手である。

困難②…/ki/と/ki/の中間のような音や/r/音と/d/音の混同がある。→話している内容が相手に伝わりにくく、聞き返されることが多い。

困難③…相手の思いに共感することができにくい。→やりとりが成立しにくく会話が続かないことが多い。

このような状況があった。一方で、関心のあることは進んで話したり、学級担任や採択者と一緒に構想すると作文を書き上げることができたりした。その他、気になる点として友達の言葉に反応して喧嘩を仕掛けるトラブルがあったそうである。

- ・ 活動の具体的内容

事前の状況や取り組みの中でのA児の様子から、以下のようなねらいで取り組んだ。

**困難①**に対して（言葉の共有化を図る）

I 『言葉や感情の共有を図り語彙を増やし受信力を上げること』、

**困難②**に対して（正しい発音を身につける）

II 『聞く力をつけ、正しい発音で話し発信力をあげること』、

**困難③**に対して（語をイメージ化し共感する）

III 『相手に共感して会話ができること』

## I. 感情や思いを表現する語彙が少ない。

使用した ICT 機器：iPad mini

使用した主な APP など：DropTalk、iMindMap for kids

自助具：絵カード・文字カード

絵から情景を読み取ることが難しかった。それは絵の情報から感情だけ抜き出すことができないからと考えられる。そのため A 児の反応は、採択者の想定を外れることが多かった。そこで、まず語彙を増やし、言葉を共有することをねらいとした。

### (ア)5W1H に関する言葉集め Drop Talk

5W1H をいつ(時間)どこ(場所)誰(人)どうした(動き・様子)どう思った(気持ち)といったキーワードで言葉を集める活動をした。(図 1)

### (イ)絵を見て分類・文作り (1文) Drop Talk

気持ちを表すカードを見て、言葉とマッチングさせたり、よい・良くない・どちらでもないに分類したりした。また、その絵に合う文を作る活動に取り組んだ。

### (ウ)2 から 3 の絵を見て文作り Drop Talk

2 枚の絵をつなげる活動にも取り組んだ。まず 1 枚ずつ文を作り、それらをつないでいった。(図 2)

### (エ)キーワードから言葉広げ iMindMap for kids

スリーヒントクイズを作った。まず、5W1H で集めた言葉を中心に置き、そこからその言葉に関係のある言葉を記入していった。(図 3)

図 1 5W1H の言葉集め



図 2 絵を見て文作り



図 3 キーワードから言葉広げ



## II. /ki/と/ɕi/の間のような音や/r/音と/d/音の混同がある。

使用した ICT 機器：iPad mini

使用した主な APP など：日本語の発音、ボイスメモ

自助具など：お口の体操、イ列・エ列音促音化構音検査表、正誤判断ボード、鏡

/ki/と/ɕi/のある音 (/kiki/と/ɕiɕi/) 違いを聞き分けることが出来なかった。また、/r/音と/d/音を言い分けることが出来なかった。そのため、ラクダ/rakuda/ダクダ/dakuda/のような誤りをしている。練習開始直後は、ボイスメモに録音したものを再生した時に「何回聞いても分かん。」と言っていた。しかし、波形の変化に関心を示したので、発音練習を繰り返す動機となった。そこで、正しい発音を身につけることをねらいとし、以下のことに取り組んだ。

### (ア)発音時の舌の様子を知る 日本語の発音、カメラ、鏡、お口の体操

日本語の発音のアニメーションを見ながら舌の動きを確認したり、鏡を見ながら採択者の指示に従って舌を動かしたりタンギングをした。

(イ)/r/音と/d/音の言い分け 正誤判断ボード

A 児と一緒に集めた「ダ」のつく言葉（ラクダ・滑り台・大根・サラダ・だんごなど）の練習をした。（図 4）

(ウ)/ki/と/tei/の聞き分け、言い分け 正誤判断ボード

採択者が言う/ki/と/tei/を聞き分けたり連続した/ki/や/tei/が同じかどうかを判断したりする練習に取り組んだ。また、自分でも/ki/と/tei/を連続したり/ki/と/tei/を繰り返したりして言う練習に取り組んだ。

(エ)ターゲット音の練習 ボイスメモ、正誤判断ボード

例えば、「ききゅう」と「ちきゅう」を言い分ける練習では、まず、「ききゅう」を5回録音し、正しく言えているかどうかを判断する。同様に「ちきゅう」についても行う。どちらも正しいことが確認できたら、「ききゅう」と「ちきゅう」を交互に言い分ける練習をする。ターゲット音練習の手順としては、単音→連続音→連結音→単語→語句→短文である。特に、連続音では、回数や速度に変化を持たせながら、時間をかけて練習に取り組んだ。（図 5）

(オ)チェック表の活用

実践開始から定期的にイ列・エ列音促音化構音検査表で発音のチェックを行い、A 児自身も改善していることが自覚できるようにした。

図 4 /r/音と/d/音の言い分け

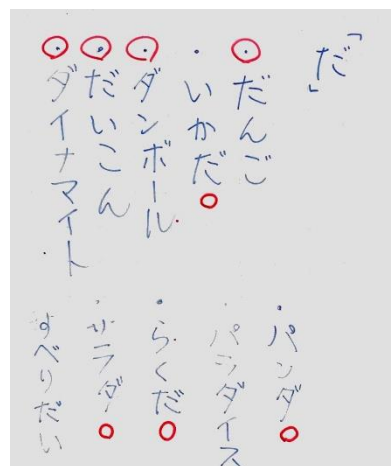


図 5 ターゲット音の単語練習



### III. 相手の思いが共感することができにくい。

使用した ICT 機器：iPad mini

使用した主な APP：ACFlip、Spark Video

自助具：聴写用文例、表情絵カード、感情カード（文字）、情景絵、A 児のノートなど

特に、気持ちなどを尋ねられると「普通」「べつに」「わからん」と答えたり、質問したことに対して知っている情報だけを羅列したりする。そのため、相手に理解してもらいにくく、伝わりにくい。さらに、表出の仕方が独特である。これは、言葉や感情が共有化されていないことが要因と思われた。

そこで、まず、慣用句などの慣用表現や暗黙の了解を明文化して活用した。また、ちびむすドリルのカードやプリントなどを言葉とマッチングさせることで感情の共有化も図った。このことにより、共感する力をつけることをねらいとした。

(ア)慣用表現に関する聴写 ACFlip、聴写用文例

挨拶や暗黙の了解、天気を表す事柄などを文にし、聴写した。

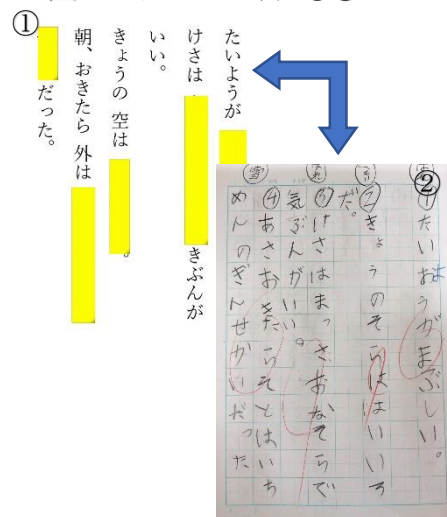
(イ)聴写した文字の確認 ACFlip、A 児のノート

ACFlip で一文字ずつ確認しながら答え合わせをする活動に取り組んだ。（図 6①②）

(ウ)聴写した文の音読 A 児のノート

答え合わせをしたものを声に出して読んだ。

図 6 聴写文の確認①②



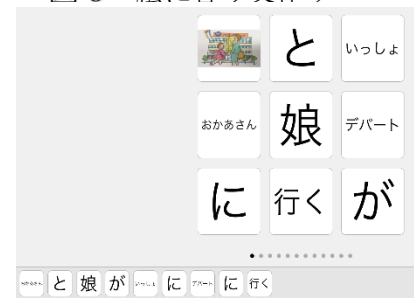
(エ)表現 (作文や自作のクイズなどの録音) 表情絵カードなど

- ① 表情を見て感情カードを選択したり、言葉と表情をマッチングしたりする。(図7)
- ② 複数の絵から単語に合う絵を選択した。
- ③ 慣用表現を表している表情の絵カードや感情カード(文字)をマッチングする。
- ④ 絵に合う文を作る。(図8)
- ⑤ お話タイムでしたことなどについて話す。
- ⑥ スリーヒントクイズを録音する。

図7 表情と感情の確認



図8 絵に合う文作り



・対象児の事後の変化

I. 感情や思いを表現する語彙が少ない。

- ◎感情を示す言葉や動詞・形容詞を進んで集めた。
- ◎これらの言葉を使ってスリーヒントクイズなどを作ることができるようになった。
- ◎「わからない」と訴えることが減った。

II. /ki/と/ti/の間のような音や/r/音と/d/音の混同がある。

- ◎ボイスメモを操作して自分の発音を確認し、正誤判断ができるようになった。
- ◎自分の発音の誤りに気づき、進んで言い直すようになった。
- ◎正しい発音でチェック表の単語をほとんど言えるようになった。

III. 相手の思いに共感することができにくい。

- ◎挨拶、暗黙の了解、天気などの表現を知り、活用が見られるようになってきた。
- ◎「どうして」「なんで」という、問いかけが増えた。
- ◎助詞の使い方がじょうずになった。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

当初、会話が続かないことでねらいを「話すことを楽しみ、身の回りの人と進んで話すことができる。」としていた。しかし、語彙を増やす取り組みの中でA児の言葉の使い方や物事の感じ方にズレを感じた。それは、A児の示す反応が採択者の想定外で、用意していた教材を急遽変更したり、キーワードや5W1Hに関する言葉集めで、単語そのものが出てこなかったりしたこともあったからである。

また、言っている言葉が相手に伝わらない事は発音の誤りのためであると考えた。まず、楽しむためには言葉が共通化されていなければならないと思った。そして、コミュニケーションとは双方向のやり取りであることからねらいを変更することが必要であると考え、ねらいを以下のように軌道修正して実践を行った。

**発音の改善と語彙を増やすことでコミュニケーションの力をつける。**

このねらいに近づくために困難①に対して「言葉の共有化を図る」困難②に対して「正しい発音を身につける」困難③に対して「語をイメージ化し共感する」活動を行った。その結果、以下のような気づきをもった。

I. 問いかけの増加～採択者と会話が続くようになってきた。

語彙の不足や意味の無理解が言葉集めや聞き書きを繰り返すことで解消し、その結果、問いかけが増加したのではないか。

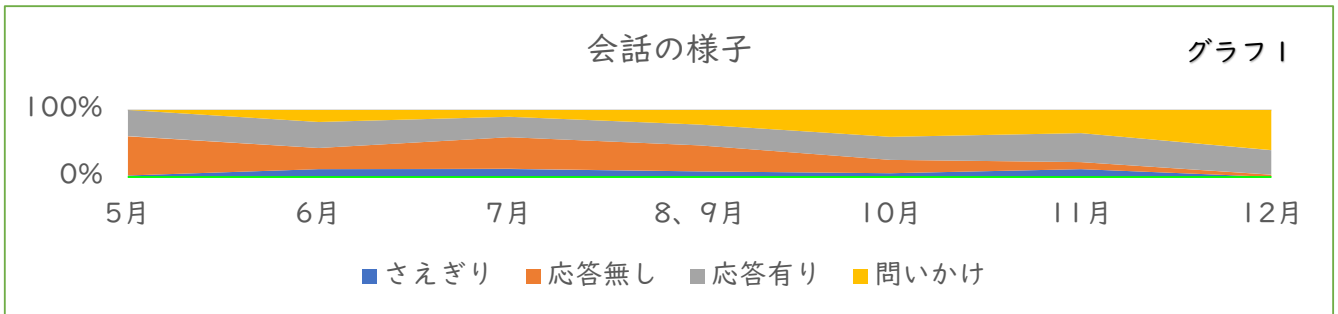
II. **構音の改善**～言ったことが伝わる実感を得た。

会話中に発音の誤りに気づき、言い直すことができるようになってきた。そのため、発した言葉を聞き返されることが減り、相手に正しく伝わった実感しているのではないかな。

・エビデンス（具体的数値など）

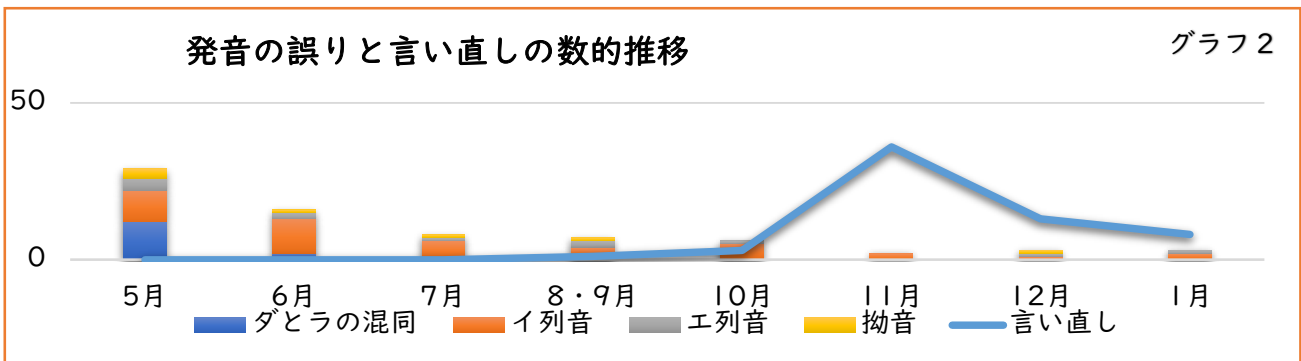
① **問いかけの増加について**（グラフ1）

夏休み明けからA児の問いかけが増えてきた。また、採択者とのやりとりが多くなり、会話が続くようになってきた。また、応答は数的にはあまり変わらないが、一問一答的な応答から自分の考えや気持ちを言うような応答ができるようになってきた。



② **構音の改善について**（グラフ2）

6月以降ラ行音とダ行音の混同が見られなくなった。誤りの言い直しができるようになった。8.9月ごろから発音の誤りが減り、発音が明瞭になった。特に、11月にはボイスメモでの気づきではなく、発した直後に間違えていたことに気づき、「あっ、間違った」という呟きと共に正しく言い直す様子が多く見られている。11月以降発音の誤りはほとんど改善している。会話の中で習慣化してしまっているもの（勉強・ゼリーなど）が少数見られる。



・その他エピソード（画像などを含めて）

A児の関心ごとはいつも虫のことだった。ある日、A児からカマキリのことで文作りをしたいとの申し出があった。そこで、図書室へ行ってカマキリの絵本を借り、そこから写真を取り込んで文作りを行った。このとき、採択者から助詞のない文は変であることを伝えてできた文が図9である。その後、絵に合う文作りを繰り返した結果が図10である。このときには、A児が自分で助詞の不足に気付いている。

またある日、生き物クイズを作ろうと提案した時、A児が自分から出題したことがあった。「猫より大きいネズミがいるのでしょうか。」というものだった。干支の話をした回の次の回で、A児の関心ごとの広がり

図9 カマキリの絵に合う文



図10 3つの絵に合う文



一つと考えている。採択者とは、「電気がコンセントから流れ出さないのはなぜか」のような話題で盛り上がり話をしたこともある。このように、最近では、A児との会話がスムーズになっている。

保護者との懇談時にも会話について話題となった。「そういえば、最近普通に話していますね。」と話された。兄と同じように会話として成り立っていて、いつの間にか今までと違い、話を楽しんでいるとのことだった。